

縮小都市トリノの挑戦

表題の講演会が名市大滝子キャンパスであり参加した。講師は龍谷大学政策学部教授の矢作弘さんである。矢作さんはジャーナリストとしても著名であり、多くの著作に接してきた。写真は昨年 11 月に出版された岩波新書だ。講演にも関係するので、再読して耳を傾けた。まずは、講演に関係する箇所を紹介しておこう。

フィアットフォーディズム時代のトリノは、ポストフォーディズム時代を迎えてどのように変貌してきたのか、それをここでは「トリノの再位置化」と表現する。「トリノの再位置化」の実相を、「都市イメージ」の変化と物理的、建築的な「都市空間」の変容を通して語ることにする。当然、「都市イメージ」と「都市空間の変化」は、別々におきるのではない。その相互作用である。フィアットを頂点とする垂直統治型「都市社会システム」がトリノの一切を牛耳っていたが、それが崩壊し、最近のトリノ復活の枠組みは、EU、州政府、都市政府、大学／美術館などの機関、民間財団、企業、経済団体、非営利組織が構成する連携／協働のガバナンス（共治）－水平連携型「都市社会システム」である。

そこでは、トリノ市政府は、成長とイノベーション、都市のブランディングを重視し、調整型のリーダーシップを発揮している。---- 半面、衰退地区の再生や新しい都市型産業が生成される場面では、民間の自生的、自発的な取り組みは弱い。「トリノの再位置化」が顕著になった 2000 年前後以降、それまでの人口減少傾向が反転し、増加に転じた。人口増加を牽引しているのは、モロッコ、東ヨーロッパからの移民である。したがって「トリノの再位置化」が、直ちに「トリノの縮退」停止につながっている、と判断するのは拙速である。しかし、トリノが過去 20 年余の間に大きく変貌した事実は、可視的、物理的な風景の変化が如実に物語っている。

矢作さんはトリノをたびたび訪れており、今回の講演も最新の「調査報告」であった。話はトリノの歴史的展開から始まり、産業都市の盛衰から「ジェントリフィケーション」がどのように展開してきたかに焦点を当てる。「縮小都市トリノの挑戦」がどのように展開し、現段階をどのように評価するかなど、多くの示唆が得られた。あらためて時間軸と空間軸という分析視点を考えさせられた。



(2015 年 10 月 25 日)